

Title	アブ・ハミド旅行記による北ユーラシアのスキー
Author(s)	松下, 唯夫
Citation	大阪外国語大学学報. 73 p.101-p.109
Issue Date	1987-03-25
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81143
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

アブ・ハミド旅行記による北ユーラシアのスキー

松 下 唯 夫

A STUDY ON SKIS IN NORTHERN EURASIA FROM ABU-HAMID'S ACCOUNT OF HIS JOURNEYS TO EURASIA

Tadao MATSUSHITA

In Greece and China, we can find old descriptions about (equipment used for running on snow). It is, however, hard to decide whether these are skis or KAN-JIKI (special footgear made of wooden hoops with rope straps and metal cleats used for walking on snow).

Abu-Hamid's (1080—1170) account (1130) has a detailed description of the length, width and feature of skis, and the length and material of sticks together with the explanation of how to use them. It is the oldest written account concerning skis that I have ever come across.

In the present paper, I will introduce the section on skis from Abu-Hamid's account and discuss its reliability.

ギリシャや中国の古い書物の中に「雪の上を走り回るもの」について記述されているが、それがスキーのことを示しているのか、それとも雪の上を滑らせることのできない標（かんじき＝雪靴）であるのか、断定することは難しい。

アンダルシア人で旅行家・商人であるアブ・ハミド（1080～1170）は、1162年 Mosul で「心の贈り物」を書いた。それは、寓話や珍奇物に関する話で、彼が旅行中に経験したことや聞いたことが記述されている。その中にスキーのことが書かれ、スキーの巾と長さ、ストックの長さや材質などが詳しく記述されている。これが古い時代のスキーの様子を詳しく伝える書物として、筆者が知る限り最古のものである。ここでは、スキーのところだけを紹介し、その信憑性について述べたものである。

I. 古代スキー史の概要（14世紀頃までに記述された書物を主に）

スキーは、雪や沼地の多いところで狩猟をするために考えられたものである。その痕跡は、スキーをしている人物の岩石刻画⁽¹⁾、沼地で発見された木のスキー⁽²⁾によって紀元前2500年にまでさかのぼることができる。古代スキーの分布は、スカンジナビア半島の東部からユーラシア大陸を通り、ベーリング海峡までの亜北極帯である。その南限は7度の等温線で、十分な積雪量を示すところである。この等温線は南スカンジナビア半島の西部から始まって、北アジアを東方に走り、最後にウラジオストックの南方、北緯約40度の太平洋に達する。スキーは、世界の気候が、現在の気候と基本的に同じになった中期石器時代（紀元前1万年）から後期石器時代（紀元前4000年・ヨーロッパの平均的年代）にかけて発生したと推測されている⁽³⁾。また、人類の移動や、言語学、民族学の立場から、スキーの発祥地は中央アジアのアルタイ地方で、そこから、西はウラル山脈を経てスカンジナビア半島へ、東はシベリアから北アメリカへと広まったと考えられている⁽⁴⁾。

中野理は⁽⁵⁾、ギリシャのヘロトドス（紀元前485年ごろ～前425年ごろ）が著書『歴史』⁽⁶⁾のなかに、アルタイ地方に住む民族が『山羊足』で雪中を走ったという記述を、スキーと結びつけている。中野理は、これをスキーを履いて、山羊のように、自由に雪上を走った習俗を説話化したもので、スキーに関する最古の文献であるとしている。また、7年後に発行された著⁽⁷⁾に、紀元前2世紀ごろ書かれた『山海経』⁽⁸⁾の中の「有釘靈之國」の部分（図1参照）を、次のように解釈している。

釘靈国の住民たちが毛皮の長靴をはき、馬蹄のように割木板をつけて、雪の広野を走り廻っている姿が眼前に浮ぶであろう。と説明している。この中国の神話・伝説の短い文中に、中野がいうように、スキーをしている姿を反映しているのかもしれないが、スキーのことを言い表わしていると断定するのは難しいと思われる。

図1の左を訳すると、『その民、膝より以下毛あり、馬蹄にして、よく走る』とあり（図1、イラスト参照）その文の前後には、雪・割木板などを思わせる語句は見当たらない。

この二つの記述には『山羊足』『馬蹄』と書かれているので、筆者は、雪の上を滑らすことのできない『かんじき・雪靴』であろうと考える。

中国で最近出版された『中国大百科全書』のスキーの項には⁽⁹⁾、次のように記載されている。

《北史》⁽¹⁰⁾ 卷94对中国北方有这样的记载：“气候最寒，雪深没马……地多积雪，惧陷坑阱，骑木而行。”

北史の第94巻に中国の北方についての記述がある。気候は最も寒く、雪が深くて馬が埋もれてしまう、地面には積雪が多く、穴やくぼみに落ちるのを恐れ、木に騎^のって行く。（中国語訳・相浦果教授）

また、つづいて『新唐書』にも類似したことが記述されていると記されている。中国では、この北史の中に書かれているものが（図2参照）、スキーのことを書きしるした最も古いものとしているようである。しかし、これも『木に騎^のって』と書かれているように、かんじき（雪靴）なのか、

每部有莫何弗三人以貳之氣候最寒雪深沒馬冬則入山居土穴牛畜多凍死饒麋鹿射獵爲務食肉衣皮鑿氷沒水中而網取魚鼈地多積雪懼陷阢穽騎木而行俗卽止皆捕貂爲業冠以狐貂衣以魚皮又北行千里至鉢室韋依胡布山而住人衆多北室韋不知爲幾部落用樺皮蓋屋其餘同北室韋從鉢室韋西南四日行至深末怛室韋因水爲號也冬月穴居以避太陰之氣又西北數千里至大室韋徑路險阻言語不通尤多貂及青鼠北室韋時遣使貢獻餘無至者

(六) 郭璞云：「言丘上人物盡黑也。」

(七) 郭璞云：「即幽民也，穴居無衣。」郝懿行云：「郭注疑

本在經中，今脫去。」

(八) 郭璞云：「郝已下正赤色。」

有釘靈之國，其民從郝已下有毛，馬蹏善走⁽¹⁾。

山海經第十八 海內經

釘靈國



四六三

図1 山海經校注，袁珂校注，

上海古籍出版社出版 1980年

図2 欽定北史 卷94列伝23より

スキーであるのか，また，^{そり}橇かもしれない。スキーは，雪靴や橇から発達した（一部は雪靴でとどまる）とされ，そり・かんじき・スキーが，同じ物として扱われていた。そして⁽¹⁾，雪の上を歩いたり，滑ったりする道具の言語がまだ未分化であったことを考えると，どちらともいえないように思われる。

アジアのスキーについて、中央ヨーロッパでは、ほとんど知られていなかったころ、Wilhelm Schott は、1864年に、次のように報告している⁽¹²⁾。唐の時代（7世紀～10世紀）中国人たちは、アルタイ語族のトルコ系民族に数えられていたキルギス人を『木馬突厥』⁽¹³⁾ 木馬のトルコ人と呼んでいた。スキーと馬を比べて、その目立つ道具（スキー）にちなんで彼らをそう呼んだのである。

東アジアのスキーに関して、この中国の情報と並んで多く出てくるのは、10世紀から14世紀に記述された、アラビア及びペルシャのものである。いずれも、内容は、著者が見聞・体験した寓話・珍奇物に関する話であり、その真憑性については、著者はさほど気にもとめずに書いている。しかし、前述のものより当時のスキーを概ね知ることができる。いくつかの記述の中で、アブ・ハミドの旅行記は、スキー用具とスキーの操作を詳しく説明し、原稿の左横の余白に、スキーの図が書きこまれている。これは、古代のスキーの様子を詳しく伝えるものとして、無類のものであり、筆者の知るかぎり最も古く、貴重な資料と考えている。

II. アブ・ハミド旅行記（原典の一部）

彼らには黒テンがある。商人たちは彼らのために、これらの刀や牛の骨や羊の骨を持参し、その代金として、黒テンの皮を受け取る。こうすることで商人たちは、たいそうな利益を得る。さて、彼らのところへ行く道は、雪が常に消えることのない土地にある。人びとは（雪の上を）滑って進むために板を用いるが、各々の板は1バーア（両手を広げた長さ）、幅1シブル（ひとわり）にけずられている。板の前方と後方は地面に着かないように上にそっている。板の中央には、歩行者が足を置く場所がある。そこには穴が開けられ、強い皮ひもが通され、それで彼らの足をしばる。また両足に、はめられた2枚の板を、ちょうど馬の手綱のように、ひもを引いて同時に進行させる。このひもは左手で掴んでいるのである。右手には足の長さほどの杖を掴んでいる。杖の最下部には人間の頭ほどの、たくさんの羊毛をつめた軽い布球がついている。歩行者は雪の上で、この杖に体重をかけ、ちょうど船の水夫が行うように背後に押す、すると雪の上をすばやく進むのである。（アラビア語訳・池田修教授）

III. 記述の信憑性

a) アブ・ハミドの人物・旅行先について

アブ・ハミドは、どのような人物であったのか。また、前述のスキーは、どこの国で見聞したのであろうか。

アブ・ハミドは1080年グラナダで生れ、1170年にダマスカスで死んだ。その長い人生の大半を商人として旅をし、自分の利益とイスラム教の伝導活動とを結びつけた。彼は全てのイスラム教国を訪れ、またイスラム教と交渉があった国にも行っている。大部分の地中海諸国、イラン系アジア、

لحم السمور والتجار يحامون انهم هذه السمور
وعظام البقر وعظام الغنم باخذون انما لنا جلود
السمور ولهم في ذلك ربح شديدا الطريق انهم في
ارض لا تبارقها الثلج ابداة تحذ الناس لا يخلصه
الوا اما ينحتوننا طول كل اللوح باع وعرضه شبرا
مقدم ذلك اللوح وثبوته من ثقبان عن الارض
وفي وسط اللوح موضع يضع الماشي فيه رجله ومدة
ثقب قد شذوا فيه سمورا من جلود موتيه عند
على ارجلهم وبقر بين اللوحين التي تكون في جلية
لشد الطويل مثل عار الفرس تشك في يد الماشي
وفي يد اليمنى غصه بطول الرجل وفي اسفل العا
مثل الكره من الشياب محتوية بالصفوف كثير مشا
رائل الانسان خفيفة يعتمد على تلك العضاع
الثلج ويدفع العضاع لفظ ظهرة كما يصنع الملاح
في الكفينة فيذهب على ذلك الثلج بسرعة ولولا

شذوا الارواح
التي في
الجلود

Fº. 101 v del ms. (pp. 17-18).

ユーラシアを扱った原典の一部（資料提供，デンマーク・スウェーデン語教授菅原邦城）

César Dubler, Madrid 1953: ARABER VIKINGAR VÄRINGAR, Stig Wikander 1978, P83

トルコ系アジア，そして東ヨーロッパを訪れている。彼は二度自分の旅行について書いた。1120年代に彼は4年間バクダードに滞在し，そこで『西方よりの不思議なことのアンソロジー』を著わし，そして1162年に彼はモスル（Mosul・イラク）で『心の贈り物』を書いた。

イスラム辞典¹⁴⁾によれば，北ユーラシアへ旅行したのは1130年以後となっている。彼の生涯につ

いて、あまり知られていないと、このイスラム辞典はことわっている。

彼は30歳頃故郷を去り二度と帰らなかった。最初 Ifrikiya にいて、1117-8 年 Alexandria に向けて発ち、その後1123年まで Cairo にいた。次に Damascus に行き、さらに Baghdad で 4 年間過ごす。1130年 Persia の Abhar に行き、さらに Volga へ。後ハンガリーで1153年までの 3 年間いる。Sakāliba から Khwārizm に着き、さらに Bukhārā, Marw, Nishāpūr, Rayy, Isfahān, Al Basra を通ってアラビアへ巡礼の旅に行く。1155年 Baghdad におちつくが 6 年後 Mosul へ。さらに Syria へ行き、Aleppo へ行き、Damascus におちついて1169-70年死ぬ。

b) 黒テンについて

アブ・ハミドは、旅行先の中に、黒テンの毛皮を入手することができるサカーリバの国・ヴォルガへ行っている¹⁵⁾。このヴォルガへ、彼より70年前(922年5月12日)に行ったイブン・ファドラーンは、その旅行記¹⁶⁾の中に、黒テンの取り引きがあったことを次のように記述している。

§ 4. 彼らルース人の船がその『アティル河畔の港』に着くと、(中略) おお、わが神よ！私は斯程の女奴隷と斯程の黒テンの毛皮を持って、遠方の国から参りました。(P.68から引用)

§ 21. サカーリバの王には、ハザルの王に納めるべき貢租として、国内の各戸毎に一枚あての黒テンの毛皮が課せられている(P.54より引用)とあり、ヴォルガでは、黒テンの取り引きが盛んに行われていたことを示している。

アブ・ハミドは、このヴォルガでスキーを見聞したのか、それともヴォルガでの空白・約20年の間に、前述の『毛皮の道』を通して、その途中もしくは最上級の黒テン毛皮があるアルタイ・シベリアで見聞したのかもしれない。また、黒テンの毛皮を直接手に入れるためにヴォルガ河の源流へ行ったのかもしれない。いずれにしても、どこかで見たに違いない。なぜならスキーのことが詳しく書かれ、その内容が実際に見た者にしか判らないと思われるからである。

c) スキー板の型について

スキー板が前も後も、そり上がったものは、ノルウエーのレーディ島で発見された岩石刻画(図3参照)や、Le Ski¹⁴⁾、P.23のスキー(写真)があり、現存している¹⁷⁾。このオスロのホルメンコーレンにあるスキー博物館の館長であるヤコブ・ボーゲは、そり上がったスキーについて、次のように説明してくれた(筆者の1981年夏、1985年春の聞きとりによる)

獲物に出合って、すばやく後方に退却しなければならないとき、後退しやすいように後方も、そり上げられている。また、前方のそり上がっている部分は、非常に折れやすく、もし折れたときは、ひっくり返して、後方を前にして滑れるように工夫されている。狩猟のときの安全策である。

d) 手綱スキーについて

アブ・ハミドが記述した後、ペルシャの歴史記述家 Raschid ed Din は、モンゴルの5代皇帝フビライ汗(1259年~1294年)の宮廷に仕え、スキーについて体験したことを1307年に報告している¹⁸⁾。彼はアブ・ハミドの見た手綱スキーとよく似たツァナと呼ばれるスキーのことを書いている。彼が先輩の記述を読んだことがあるのかどうか、わからないが、このスキーはキルギス族や、ツンゲー¹⁹⁾

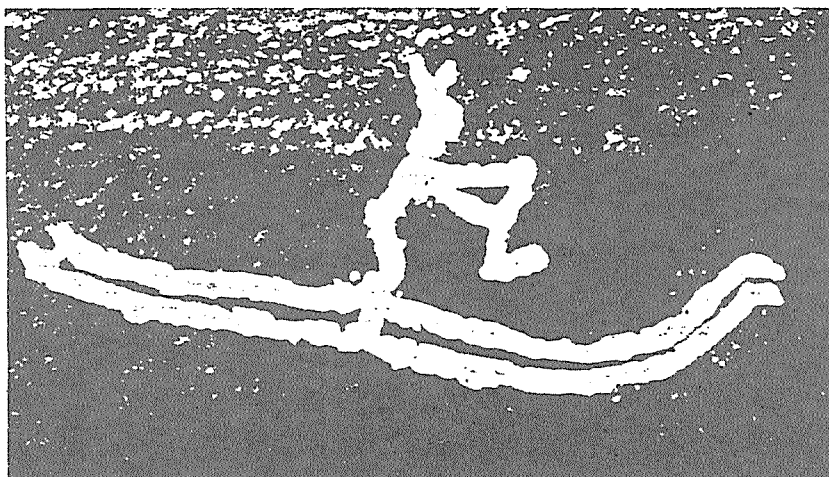


図3 Gutorm Gjessing.「北の山々の絵」オスロ 1936, P.236 より1932年に Helgland の Rødøy 島で発見された
岩石刻画

ス族が使っていると記述している。また、Raschid ed Din がスキーを試みようとしたら、足が互いに離れてバラバラになってしまった。それを見なければ人は信じないだろう。また、フビライ汗もスキーに興味を抱き、スキーの専門知識を持っている人を使って、その奇蹟の技を披露させた⁽²⁰⁾。と書いている。

アブ・ハミドの見た手綱スキーとは、少し型が違うが、同じようなものが見つかっている（図4、図5）また、板の中央の穴に皮ひもを通し、足をしばる方法は、古代スキーの多くのものに見られる。

e) 杖について

杖の最下部につけられた布球は、現在のスキー・ストックのリングと同じ原理である。つまり布球のない杖で、体重をかけ後方に突くと、やわらかい雪ならば、雪に突きさしてしまい、前に進むことができないのである。また羊毛を使うことは、水分を含みにくく、軽いので扱いやすい。

まとめ. 古代スキー史のところでは、アブ・ハミドの旅行記までに記述されたものをあげたが、いずれも詳しく書かれたものはなかった。このことは、このアブ・ハミドの旅行記の記述は、非常に貴重な資料であるといえる。また、スキーの長さ、幅、型、ビンディング（締具）の位置、締具の種類と方法、スキー板の操作方法、ストック（杖）の型、材料、ストックの使い方など、非常に詳しく記述されている。これは、見た者でないと知り得ない事柄であると筆者は考える。また、この手綱スキーに似たスキーが、沼地から発見されたことなどを考え合わせると信憑性の高い記述で、筆者の知るかぎり最古のものであると考える。

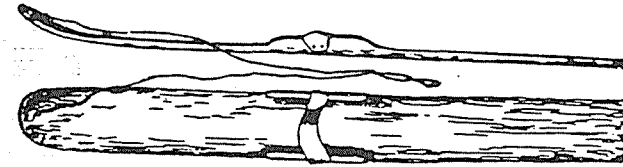


図4 Furnes の Gantdaeter にある Höljemoor で 1918 年に発見された手網スキー
(Luather, Finds of ski 1960 年 P.147 より)



図5 手網スキーを履いた狩猟者、ロシア人画家 Anatoli Ossipowitsch Walter が1902年に白樺の皮に書いた絵
(Luther, Finds of ski 1960 年 P.46 より)

註

- (1) ノルウェー Rødøy 島 (図3), Gutorm Gjessing 「北の山々の絵」 オスロ1936年。北西ロシア Onegas 湖 Zalavrouga などの岩石刻画
- (2) スエーデン, Ångermannland・Hoting スキー。ソビエト・プスコフ (モスクワ北西880キロ) で発見されたスキー, など。
- (3) Erwin Mehl, Karl Meuli, Serge Lang, など
- (4) Fridtjof Nansen・på ski over Grønland 1890年 P.97。Serge Lang・Le ski 1967年 P.14
- (5) 中野理著・スキーの黎明・1957年四季社, P.17~18
- (6) ヘロドトスの記事は, スキタイ商人, ギリシア商人からの伝聞にもとづくのと考えられている。その商人のルートは, 毛皮街道といわれ, 北道・南道ともにアルタイ地方に届いていたと推測されている。シルクロード事典 (加藤・前島共編・芙蓉書房昭和50年) による。
- (7) 中野理著・スキーの誕生・1964年金剛出版 P.19~20
- (8) 釘霊之国は, シベリヤのバイカル湖南部からアルタイ地方にあった国をいう。
- (9) 中国大百科全书・体育, 中国大百科全书出版社出版1982年12月, P.143
- (10) 北魏^{すい}から隋 (4世紀から7世紀) に至る歴史。
- (11) Erwin Mehl, GRUNDRISS DER WELTGESCHICHTE DES SCHIFAHRENS, Karl Hofmann 社出版1964年P.13~21
- (12) 『キルギス人の排斥について』ベルリン・アカデミー1864年 No. 6, 1865年 P.429~474。
- (13) 唐代の突厥^{とつげつ}は, オビ川の支流・イルチシ上流 (アルタイ山脈) から発展した国家 (国民百科事典, 平凡社1977, 1巻 P.264)
- (14) イスラム事典 ABŪ HĀMID P.122
- (15) シベリアの狩猟儀礼 E・ロット, フルク著田中克彦他訳, 弘文堂1980年 P.36~37
- (16) イブン・ファドラーンのヴォルガ・ブルガール旅行記, 家島彦一訳, 東外大 A・A 言語文化研究所1969,
- (17) 1815年頃に使われていたもの, オスロ・スキー博物館展示中
- (18) ARABER VIKINGAR VÅRINGAR, Stig Wikander 1978, P.98より引用 (Moskva 1965, I, 244~245)
- (19) キルギス族は, 13世紀初めチンギス・ハーンに征服されるまでエニセイ川上流・サヤン山脈 (ソビエト・モンゴル) 南部を中心に遊牧生活をしていた (国民百科事典, 平凡社1977, 4巻 P.291)
- (20) 注11) の P.64より引用